

スマート畜産技術のイノベーション・普及に関する検討会（第3回）

U-motionを通じた生産現場のデータ活用・連携と、AIによる今後の構想

2026年11月2日

デザミス株式会社　経営企画室 室長 兼 政府渉外担当（GR）　松本 智行

desamis

データから世界の農業を変える

VISION

農家と共に、次のステージへ

牛に装着するセンサー「U-motion®」で、
牛1頭ずつの行動データを集め、農家の飼養管理を支えています

事業

畜産IoTクラウド事業
U-motion®

プラットフォーム事業
U-motion Platform

会社名	デザミス株式会社（desamis Co., Ltd.）
設立	2016年6月
代表者	代表取締役 兼 CEO　清家 浩二
本社	東京都江東区青海
実績	U-motion®：スマート畜産システム市場 販売金額シェア 国内No.1※



本日の発表者
松本 智行 デザミス株式会社
経営企画室 室長 兼 政府渉外担当（GR）

※参考：富士経済 2025/11/13発刊『アグリ＆水産養殖ビジネスの現状と将来展望 2025』―2024年実績に基づく市場シェア（スマート畜産システム市場〈酪農・肥育・養豚等〉のメーカー／ベンダー別販売金額シェア）

 © 2026 DESAMIS Co., Ltd.



首輪型センサーを装着した乳用牛

本日お伝えしたいこと

牛の現場では、一次データはもうある。足りないのは「外とつなぐ口と作法」

1 一次データは、もうある p.2～3

牛1頭ずつのセンサーから、約30万頭超の行動データが毎日生まれ、牧場の中では使われている

2 足りないのは、外とつなぐ口と作法 p.4～5

公的・団体のデータや機器のデータと行き来するための、口（データ出力・連携インターフェース）と作法（項目・形式・手順の共通仕様）、同意・費用・責任のルールが整っていない

3 その先に、判断の基盤がある p.6～7

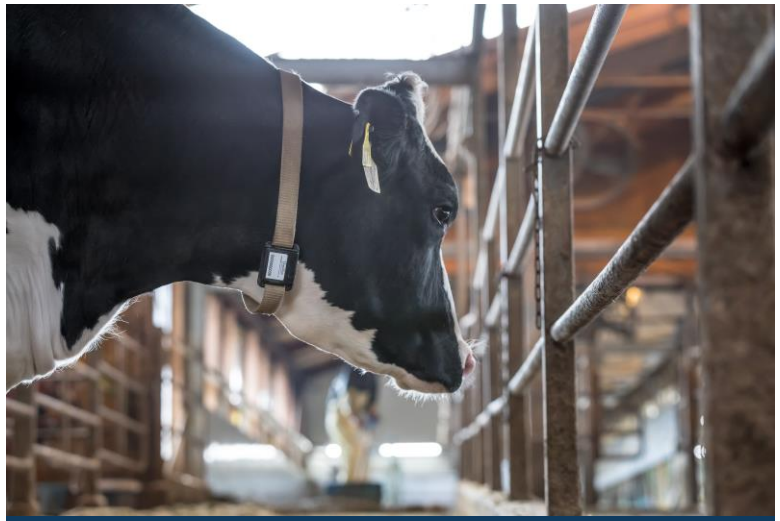
判断の良し悪しをAIが学ぶには結果のデータ（治療の転帰・格付・受胎）が要る。それがつながれば、各社のAI・ロボットが判断する基盤に進める

提言（p.8） ①機器からのデータ出力の共通仕様　②個体識別番号を共通キーにした公的・団体データとの双方向連携とルール　③協調領域と競争領域の役割分担

 © 2026 DESAMIS Co., Ltd.

U-motionとは

牛1頭ずつがセンサーになった。約30万頭超の行動データが毎日生まれている



首輪型(首) ／ イヤタグ型(耳)にも対応

記録する	採食・反芻・動態・起立・横臥・静止
知らせる	疾病・発情・分娩の兆候と起立困難
使う	スマートフォン・PCで確認し対応

約30万頭超

全国の牛からリアルタイムに行動データを取得

2026年8月時点

全畜種に対応

酪農・繁殖・肥育、どの牛の経営でも使える

利用の内訳:肥育43%・酪農37%・繁殖18%・その他3%
2025年4月時点

24時間・365日

1頭ずつ、休まず行動を記録

首輪型(首)／イヤタグ型(耳)

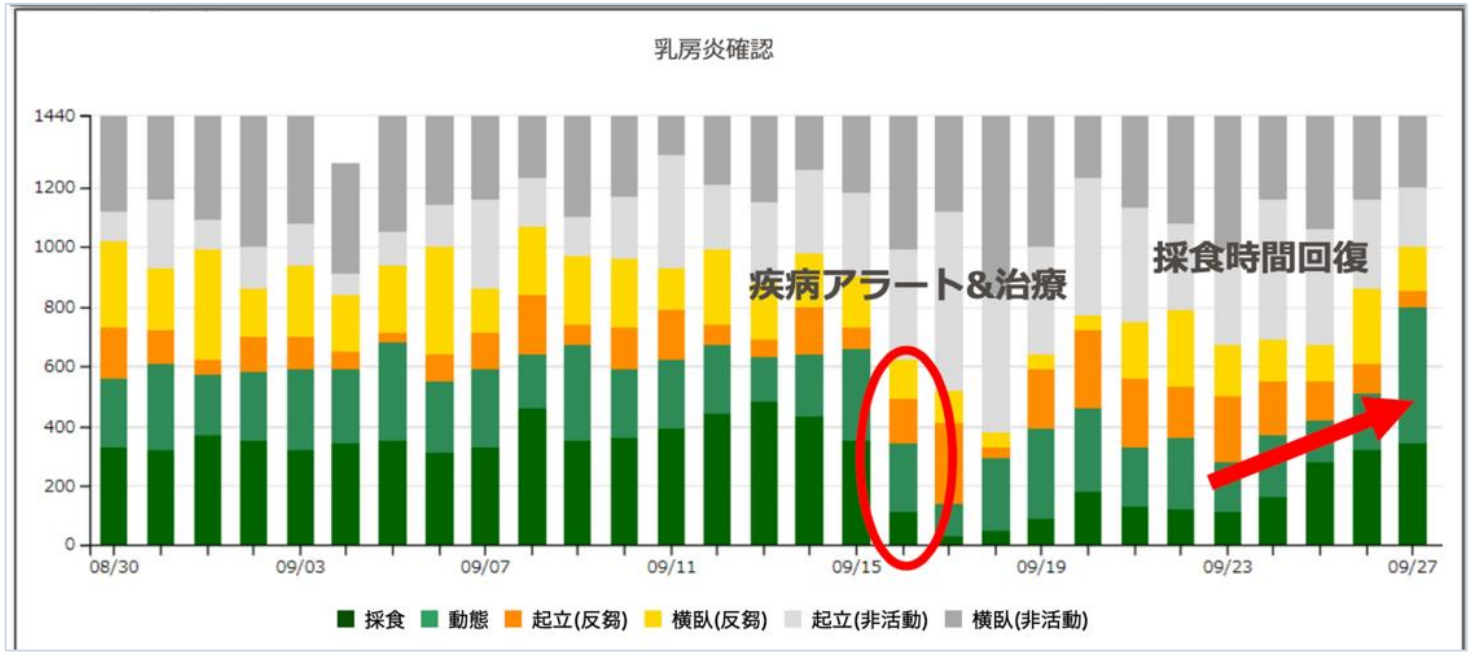


U-motionの画面(スマートフォン)
アラート一覧:発情兆候・疾病傾向・採食低下など

 © 2026 DESAMIS Co., Ltd.

牧場の中でできていること

牧場の中はつながった：分娩・疾病の検知、紙の読み取り、記録が返ってくる



U-motionの画面例：1頭の牛の1日の行動（採食・反芻・動態・横臥など）の推移。疾病アラートが出て治療し、採食時間が回復した例

夜間の分娩監視・疾病の早期発見

分娩兆候・疾病傾向・起立困難をアラートで知らせる

個体の特定

センサー1つが牛1頭に対応し、個体の特定を前提にできる。画像技術とは補い合う

紙の資料をAIで読み取り登録

個体識別番号の一覧表を撮影して登録（U-コンシェルジュ）

記録が返ってくるから、入力が続く

授精・分娩・治療の記録が繁殖成績などの指標で返る項目は入り続ける

限界：アラートは発見の補助で、診断ではない。1頭ずつの装着と、電池・機器の管理が要る
これまでの議論：第1回：肉用牛は群れの動きの中での識別が未確立／第2回：異状検知の実用化には個体識別技術の開発も重要（議事概要の要旨）

 © 2026 DESAMIS Co., Ltd.

外から来る変動は牧場では変えられない。変えられるのは、1頭ごとの判断の精度と速さ

飼養管理の改善は続ける。そのうえで、判断に要るデータは牧場の外にある

変えられないもの（外的要因）

- 飼料・資材価格の高騰
- 生乳需給の変動
- 子牛・枝肉の相場の変動
- 担い手の減少・労働時間の制約

変えられるもの（牧場の判断）

- **1頭ごとの判断の精度と速さ**
  治療する・淘汰する・授精する・出荷する、をいつ決めるか
- **判断に使うデータの範囲**
  出荷には格付・相場、淘汰には診療履歴、授精には検定・育種価。どれも牧場の外にある
- **判断を支えるAI**
  データがそろえば、AIが判断の材料を返せる（p.6〜7）

つなぐ相手が、牧場の外（公的データ・機器・市場）に広がった → 次のページで、つなぐうえでの壁を見ます

 © 2026 DESAMIS Co., Ltd.

壁は3つ。機器の取り出し口、公的データの口、そしてルール

口＝データの出力・連携インターフェース、作法＝データ項目・形式・連携手順の共通仕様。民間1社で越えられるものと、官民で整えるものを分ける

1 機器の取り出し口

現場で起きていること

搾乳ロボット等は海外製が中心で、データを取り出す口が限られる。現場では農場のPCを経由して毎日データを移すなど、個別の工夫でしのいでいる

必要なこと

1農場・1機種ごとの対応では全国に広がらない。項目・形式・出し入れの共通の作法が要る

2 公的データの口

現場で起きていること

検定・格付・共済などの公的・団体データは、システム同士で自動的につながる場面がまだ限られ、紙やWeb画面からの手入力・読み取りに頼る場面が多い

必要なこと

公的・団体データとつなぐ受け皿が要る。畜産クラウドのリニューアル（令和9年4月めど）も候補になり得る

3 ルール（同意・費用・責任）

現場で起きていること

個体識別情報には、利用規程で同意と費用の決まりがある。他の公的・団体データでは、民間のシステムとつなぐときの同意・費用・責任の共通の決め方が、まだ見えにくい

必要なこと

同意・費用負担・責任分界の型を、協調領域として官民で設計する（民間1社では決められない）

 © 2026 DESAMIS Co., Ltd.

AI(1)現場に入るAI

当社は、AIをまず生産者が使う画面の側から現場に入れる

U-motion上のAI業務支援機能「U-コンシェルジュ」から始め、使える機能を段階的に広げる

現在 **U-コンシェルジュ** AI業務支援機能・2026年6月15日 提供開始

① 使い方をサポート 「分娩兆候指数の見方が知りたい」などの質問にAIが即座に回答(カスタマーサポートの窓口も継続)

② 個体の登録を支援 個体識別番号の一覧表や資料を撮影し、AI-OCRで読み取ってそのまま登録。複数頭の確認・転記を効率化

今後(予定)

各種の入力作業や牛の状態の確認など、牧場の日常業務を支援する機能を強化

将来は、蓄積された飼養管理データや業務記録を活用し、AIが現場業務や経営判断を支援できる基盤づくりを進める(→p.7)

※当社お知らせ(2026年6月15日)時点の予定。変更となる場合があります

ねらい:現場の手間を減らし、牛と向き合う時間をもっと長く

登録・確認の手間が減る

個体識別番号で調べて手で入力する作業と、入力ミスを減らす

必要なときに、その場で聞ける

問い合わせを待たずに使い方を確かめられる。操作に慣れた人が少ない現場でも使える

記録が入り続け、データがたまる

p.3の循環が強くなり、AIが判断に使えるデータが増える(p.7)

 © 2026 DESAMIS Co., Ltd.

ロボットではなく「判断の基盤」を担う。人・AI・ロボットが判断する基盤をつくる



構想図(当社プレスリリース 2026年8月31日より)

判断の良し悪しをAIが学ぶには、結果のデータ(治療の転帰・格付・受胎)が要る

使う

生産者・獣医師／各社のAI・ロボット

判断の基盤

一次データをAIで学習・活用し、判断を支える

一次データ

牛1頭ずつの行動データ＋作業・対応の記録＋外部の結果データ

使われたデータは基盤に還元され、判断が良くなる

データ基盤の「協調領域」と「競争領域」(当社の整理)

協調領域(官民・業界でそろえる)

機器・システムの間でデータをつなぐ作法
同意・費用・責任分界のルール

競争領域(各社が工夫する)

現場の画面・使いやすさ
アラート・判断の精度、AIのサービス

出典:当社プレスリリース(2026年6月15日・8月31日)。協調領域／競争領域は、第1回のAIロボット協会の資料の考え方を、畜産のデータに当てはめた当社の整理
※ 構想であり、内容・時期は今後の開発・検証により変更となる場合があります

 © 2026 DESAMIS Co., Ltd.

牛の現場から、官民の役割分担について3点を提言する

1

機器からのデータ出力の共通仕様

海外製を含む畜産機器から飼養管理システムへのデータ出力について、データ項目・形式・連携手順の共通仕様（取り出し口の共通の作法）を官民で整備することが必要

2

公的・団体データとの双方向連携

個体識別番号を共通キーとして、牛個体識別情報・乳用牛群検定・枝肉格付・家畜共済等の公的・団体データと民間の飼養管理システムが双方向に連携できる仕組みと、同意・費用負担・責任分界のルールを整備することが必要

3

協調領域と競争領域の役割分担

データ連携の仕様・ルール・同意管理は協調領域として官民で整備し、現場の画面・解析・AIサービスは競争領域として民間が担う、という役割分担を明確にすることが必要

導入が進んだ牛の現場から、次に官民で整えるべきこと。スマート農業の導入加速化を、現場で使われ続ける形に

 © 2026 DESAMIS Co., Ltd.